

## 復活節第5主日礼拝説教「まもなく聖霊が降臨します」

日本基督教団石神井教会 2020年5月10日

### 【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 5章13～25節

<sup>13</sup>兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。<sup>14</sup>律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。<sup>15</sup>だが、互にかみ合い、共食いつているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

<sup>16</sup>わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。<sup>17</sup>肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。<sup>18</sup>しかし、霊に導かれているのなら、あなたがたは、律法の下にはいません。<sup>19</sup>肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、<sup>20</sup>偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、<sup>21</sup>ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。

<sup>22</sup>これに対して、霊の結ぶ実とは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、<sup>23</sup>柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。<sup>24</sup>キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。<sup>25</sup>わたしたちは、霊の導きに従って生きているのなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 15章18～27節

<sup>18</sup>「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。<sup>19</sup>あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。<sup>20</sup>『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。<sup>21</sup>しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。<sup>22</sup>わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。<sup>23</sup>わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。<sup>24</sup>だれも行つたことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見つうえて、わたしとわたしの父を憎んでいる。<sup>25</sup>しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。

<sup>26</sup>わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。<sup>27</sup>あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

## 「世」の中を生きる

初夏の連休が終わると共に解除されるものと期待していた「緊急事態宣言」が延長されました。一か月前、わたしたちが主のご受難の特別な週を過ごす中で政府から出された「宣言」は、今月いっぱい、わたしたちが「聖霊降臨」を祝うべく定められている日までを期限に、延長されたのです。欧米諸国では、このタイミングにさまざまな活動が再開され始めているとのニュースも伝わる中、わたしたちの国の教会の「イースター（復活祭）」から「ペンテコステ（聖霊降臨祭）」までの期節が丸々、「緊急事態」の世間に飲み込まれてしまったようです。三週後の「ペンテコステ」の祝いをどうするか、まだ何も決まっていますが、悲観的にならざるを得ません。

思い起こしてみれば、このような事態は、ちょうど今年の「受難節（レント）」の始まりと共に迫ってきたのです。もちろん、ウィルスにしても、政府や行政にしても、わたしたちキリスト教会の暦を知っていて、嫌がらせか当てつけのように、この事態を起こしているわけではないでしょう。はっきり言えば、社会全体の動きからすれば、この国にあってキリスト教会の存在など、ほとんど何の意味も持たない、吹けば飛んでしまうようなものに過ぎないでしょう。

教会は、本当であれば、「休業要請」のリストに含まれるような活動をしているはずのところでは、日曜日に「密集・密閉・密接」を満たさない礼拝堂は、礼拝の責任を託されている者にとっては、なんとも虚しいものです。それでも、多くの教会は、自分たちの活動の実態を自覚しているからこそ、自主的に公開の礼拝を取り止めたり、「集まり」になることを避けたりしてきました。その結果、教会のオンライン化が一気に進んだのは、むしろ幸いなことだったと受け止めるべきなのかもしれません。今まで接点のなかったような人たちのところにまで、教会は、自分たちの活動領域を広げることになった、否、そうすることができるようになったのです。

本音を言えば、わたしたち教会が「集まり」となる活動を取り止めるという判断をした背景には、「恐れ」があったと思います。周囲の皆さんや世間から後ろ指を指されるのではないかと、という「恐れ」です。信者の皆さんの中には、早い段階でご家族から教会に通うことを止められた方もありました。たとえ小さな教会だったとしても、通常どおりに「集まり」を続けていると思われることを、わたしたちは、避けたいと思ったのです。直接だれかに何かを言われたわけではなくても、「世の人々に教会が憎まれる」ようなことがあってはいけないと、考えてきたところがあるのです。教会は、確かに少し世間からずれた、浮世離れたようなところもあるけれども、それでも、わたしたちが日々の生活を送る「世の中」で生きていくべき存在なのだから、と。

確かに、今、わたしたちは、主の日ごとに「教会」という安全地帯に逃げ込むことがうまくできなくなっている中で、日々、「世の中」を生きる者としての信仰を問い直されているのでしょう。「教会の中」だけの信仰ではない。「世の中」でこそ、いかに主イエスに従う者として生きるのか、と問われているのです。

## 「世」に憎まれても…

そのような問いの中に置かれた私たちに、今日の福音書日課（ヨハネ 15 章）は、主イエスが「世はあなたがたを憎む」と弟子たちにお語りになられたと、告げています。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい」と、主イエスもまた「世に憎まれていた」ことを思い起こすように、促しています。ヨハネ福音書の中でも、これだけ「憎む」という言葉を連発している箇所は、他にありません。この箇所は、主イエスが殊更に「憎まれる」存在としての主イエスと弟子たちのことを強調された、数少ない御言葉なのです。

確かに、二千年の教会の歴史の中には、迫害によって血を流された数知れない有名無名の先達の足跡が刻まれています。教会が世間から憎まれ、迫害されることがあっても、驚いたり、狼狽えたりしないようにと、主イエスや信仰の先達から教会は絶えず警告されてきました。この国の教会も然りです。この国の教会の先達が、社会の中で厳しく追い詰められる経験をしてから、まだ一世紀も経っていません。その当時のことを経験された方も、なお残っていらっしやいます。わたしたちの多くは、もはやそのようなことは過去のことだと思いついでいるところがありますが、本当にそうでしょうか。

けれども、わたしは今日、主イエスが福音書日課を通してお語りくださっていることをもって、皆さんが、「そうだ、教会は、時と場合によっては、世間から憎まれるような状況に置かれることを覚悟しなければいけない」と、強い意志をますます強められるべきだ、とは思わないのです。あるいは、「教会は、世の中で、吹けば飛んでしまうような小さな存在なのだから、世間に何と言われようと不屈の精神で教会のあるべき営みを続けるべきだ」などと、勇ましいことをお考えになられるべきだとも思わないのです。「世間から憎まれるなら、こちらこそそれ相応に戦えばよい」ということではないはずなのです。

わたしたちは、確かに、信仰の有無にかかわらず、教会生活の有無にかかわらず、この「世の中」で生きていくのです。ときには、そこで戦わなければいけないような経験をすることもあるでしょう。困難な状況に追い込まれて、二進も三進も行かなくなり、すべてをかなぐり捨ててしまいたくなるようなことがわたしたちの身に起こるときが、あるかもしれません。けれども、そうだとすると、わたしたちは、「世に憎まれる」ことに対して、「世を憎む」ことで応じるべきではないはずで、何よりも、わたしたちは、神が「その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ 3:16）と信じているのです。主イエスの御言葉と為されたことを通して、そのことを教えられてきたのです。

わたしたちの神が「世を愛された」と言われているのに、どうして、わたしたちが「世を憎む」ことができるのでしょうか。わたしたちも「世を愛す」べきなのです。「互いに愛し合いなさい」と主イエスが教えられていることは、ただ教会の仲間や、家族や友人たちだけの間でのことにとどまらず、わたしたちが置かれている「世の中」のすべての人との間でのことを言われているのです。

## 選り出されたから…

本当のことを言えば、わたしたちは、「世の中」にどっぷり浸かっていたら、このようなことに心を煩わされなかったのかもしれませんが。「互いに愛し合いなさい」という教えを、すべての人との間で実践するなどという、途方もない目標は、特別な人だけが達成できることであって、市井に生きる名もないキリスト者がひとり実践できるようなことではない。わたしたちは、せいぜい、家族を愛し、信仰の友を愛し、少しの友人を愛し、そうして「愛」のひとかけらを実践することでキリストの愛、神の愛を証しすればよいだろう。わたしたちは、信仰者として葛藤しながら、そう思っているところがあるのです。そのような葛藤さえ、教会から離れ、祈りから離れて、「世の中」に戻ってしまえば、思い悩む必要のないことなのだろうと想像しながら、なお信仰者として生きている。

それが、わたしたちの本当のところではないでしょうか。

けれども、そのような葛藤に思い悩むようになることこそ、わたしたちが今、礼拝にあずかっている理由なのではないでしょうか。キリストが「**あなたがたを世から選り出した**」と言われる目的なのではないでしょうか。

主イエスが言われているように、わたしたちは、本来、「世」に属していた者です。「世」の身内です。「世の中」にこそ、わたしたちの居心地の良いところがある。そこに戻れば、愛したい人を愛し、憎みたい相手を憎めばよい。身内を最優先にし、他人にはかかわらなければよい。何と、簡単なことでしょう。けれども、そのような「世の中」から、主イエスは、「あなたがたを選り出した」と言われるのです。わたしたち自身の本音そのものである「世の中」から引き出されて、別のところに置くと、言われたのです。

主イエスが「**世があなたがたを憎む**」と言われるのは、主イエスに出会わされたことによって、わたしたちが自分自身の中で分裂した思いを持つようになり、葛藤に思い悩むようになる、ということなのではないでしょうか。

このようなことを言うから、キリスト教や教会は、人から避けられるのかもしれませんが。心の葛藤を解消し、平穏を与えてくれてこそ信心を求めている人は、あまりに多いのです。心の乱れのない悟りに導いてくれる信心のほうが、費用対効果が高い、というのです。それでも、教会は、教会に導かれ、信仰に生きることによって、日々、葛藤が深まることを、隠すわけにはいきません。それは、わたしたちが「**世を愛する**」ようになるために通らなければならない道だからです。この世界を愛された主イエスが行かれた道だからです。

喜びや楽しみだけではない。苦しみを受けとめ、嘆きや悲しみを抱え込み、ときに敵意を引き受けられたお方でした。それが「世の中」にある現実だからです。その現実本当に身を置くならば、葛藤せざるを得ない。それでも、それは、答えのない葛藤ではないのです。わたしたちは答えを知らないかもしれませんが。けれども、真の答えをご存じのお方がある。その答えは、必ず与えられるでしょう。「**真理の霊が来る**」のです。「だから、わたしもあなたがたを遣わす」と、今日も、ご復活の主はわたしたちを「世の中」へと送り出されるのです。